生に怒られに病院に来るからな」。酒を飲んでは肝臓悪くしている源蔵爺さんでした。こうして私のまた霧多布の生活はまた始まったのであります。8,000人に１人の医者。そして１人の医者が日夜がんばっているということにまったく変わりなかったのであります。

**○退職が認められる**

そうしているうちに母が90を超えていることに気がつきました。退職を申し入れました。今度は素直に退職を認めてくれたのであります。村の人たちも玄関に来て家内と抱き合って別れを惜しんで泣いている姿が何回もありました。そして出発の日、病院の前には何百人も来ました。私が苦労してアキレス腱の手術をやった商工会長も来ました。剣道を教えた連中もみんな来ておりました。私が行ってすぐ顎がはずれて困った、ちさ婆さんなんかも、私はやっと『外科診療の実際』という本を見て、そのはずれた顎を何とか本を読みながら入れた、そんな婆さんも来ておりましたし、ブロック注射でやっと腰の痛みがとれたという、友江婆さんも来ておりました。家内と別れを惜しむ人たちがたくさんおりました。そして、私と家内とが雪道を２人で赴任した両方の歩道には、みんなが送ってくれました。ある患者さんは車の窓から手を入れて私の手を離さなかった。そんな思いで札幌に帰ってきたのであります。今でも47年の習慣で朝の天気予報は釧路と根室地方を見ております。昆布が出たかな。今日は昆布が出なかったのか。そんなことを考えているうちに、札幌の天気はどうだと思っている頃には天気予報はもう消えております。

ある朝早くに電話が鳴り、そうすると、とみ婆さんが「先生、札幌さ行ったら目の赤くなったさんましか食べてねえんだべ。今朝獲ったさんま送るからな。今年の棹前昆布は先生うめえぞ。食べて元気になって浜中忘れんなよ」。そんなつきあいがずっと続いているのであります。

**○へき地医療の問題点**

『日経メディカル』っていう医学雑誌があります。それに私が25年前に医療っていうのはこうあるべきだっていう提案をしたことがあるんです。道路を良くすれば１人の医者は1.5人分くらい動ける。そして、隣接する町村がどっちもCTやMRIのような高い機械を買う必要はない。共同で買えばいいじゃないか。隣の町が小児科医を養成してきたら、こちらの町は整形外科医を呼んでくれば、地域医療というのは昂進するだろう。そういうことを書いたのでありますが、この間、編集長が来て「先生が書いたことは何１つとも、何もよくなっていない。ただ１つだけ言えることは、道路くらいは良くなったことかな」と言っておりましたが、北海道の医療というのは地方に行きますと、もう本当に崩壊しております。内科医がいなくなると外科医もいなくなる。どうしてだ。小児科医いなくなると産科もいなくなる。どうしてなんだという疑問を持ちながらもやっておりますし、こないだ紋別に行ってきましたが、お産は遠軽まで来ないとできない。根室も旭川医大との提携を私はやってきたのでありますが、あそこも内科医がいなくなった。外科医も引き上げるぞという危機に直面しております。地方の医療はまったく崩壊している北海道。知事と話してもさっぱり効果がありません。そんな中で悪戦苦闘している先生方を見ると、現役を去った私もまだまだダメだなと思いながら旭川、札幌でまだやっております。

美智子妃殿下にいただいた「へき地医療につきて語れる医師と居り、霧多布湿原霧深き中」。あの歌を心の支えとして、まだ、まだまだやれる間、地域医療をやっていきたいな、そう思っております。

ご静聴ありがとうございました。

## 電子メールによる会員への情報提供について
### －メールアドレスの登録－

◇情報広報部◇

本会では、インターネットを利用し、電子メールにより緊急性の高い情報を、会員の皆様に送信提供しております。対象は当会の電子メールアドレス利用者全員と他プロバイダの電子メールアドレスをお持ちになっていて、本会にアドレスを登録している会員です。

他プロバイダの電子メールアドレスの登録につきましては、随時受け付けておりますので、是非ご登録いただきたくご案内いたします。

**●電子メールアドレスの登録方法**

電子メールで、ご氏名、登録メールアドレスを明記のうえ、下記宛お送りください。

・申込先メールアドレス：**add@m.doui.jp**